

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業（がん政策研究事業））
分担研究報告書

がん医療者に望まれる行動に関する研究

研究分担者	稲垣 正俊	岡山大学病院 精神科神経科
研究協力者	樋口 裕二	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 精神神経病態学教室
	千堂 年昭	岡山大学病院薬剤部
	北村 佳久	岡山大学病院薬剤部
	小山 敏広	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 臨床薬学基幹分野臨床精神薬学
	片岡 仁美	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 地域医療人材育成講座
	林原 千夏	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 精神神経病態学教室
	藤森 麻衣子	国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所自殺予防総合対策センター

研究要旨 がん医療に従事する医師のコミュニケーション技術は、がん患者の精神的苦痛やがん専門医自身の燃え尽きなど様々なアウトカムに影響を及ぼすことが知られており、がん医療の質を左右する。こうした医療従事者のコミュニケーション技術の中核として、共感を示すことの重要性が知られている。日本では厚生労働省の主導により「対物業務から対人業務へ」という目標が示され、薬剤師に求められる役割が変化しつつある。例えば、病院薬剤師が緩和医療チームの必須構成要員となったことや、患者への薬剤指導を含む一部の病棟業務に対して診療報酬が認められたことなど、対他職種・对患者といった対人業務の要請が強くなりつつある。一方で、人間の共感行動に大きな影響を与えると考えられる神経心理学特性としてALT: Autistic-like traits（自閉様特性）がある。現在ではこの特性をスペクトラムとして捉えており、誰もが部分的には特性を持つことや、また一定の割合で色濃い特性を有する者がいると考えられている。近年の研究において、ALTと他者の意図や感情に対する共感の乏しさと関連が指摘されており、これまでに我々は岡山県病院薬剤師協会に所属する病院薬剤師380名を対象とした匿名調査の結果から、ALTが医療従事者の共感行動や医療従事者自身の精神健康度、また燃え尽きのリスクと関連することを示した。こうした影響を媒介する介入可能な要素の特定が望まれる。今回は、EI: Emotional Intelligence（情動知能）について着目することとした。先の病院薬剤師に加え、研究参加の同意を得た薬学部学生341名を対象に媒介モデルを用いた解析を行った。結果、EIはALTによる医療従事者の共感行動や医療従事者自身の精神健康度、また燃え尽きへの悪影響を緩和することが示された。我々は既にCST（コミュニケーション技術訓練）は医師の共感的態度を向上し、患者の抑うつを防ぐという介入効果を持つことを示している。今後、こうした知見を広げるに当たり、個人の特性であり、変化させることが難しいと考えられるALTに対し、EIのような介入可能な要素について検証を重ね、CSTによる介入の効果・効率の改善を目指したい。

A. 研究目的

1. 背景

医師（医療者）患者関係の重要性

多くの先行研究が、良好な医師患者関係は治療アウトカムに影響を及ぼし得ることを指摘している。

高血圧や糖尿病などの生活習慣病の治療にはセルフケアに関わる行動変容が重要であるが、良好な医師患者関係を構築することにより患者の治療参加を促し、健康問題の本質が共有され、治療にまつわる不安が解消することから、患者満足度や服薬や食事に関する治療アドヒアランス、血糖値や血圧のコントロールといった様々な治療アウトカムに影響を与える。

また、特に医師患者関係の重要性が説かれ、研究が進んでいる分野の一つである腫瘍医療の領域では、良好な医師患者関係は患者満足度・治療コンプライアンス・患者知識の向上・臨床試験参加者の増加・治癒的治療から緩和医療への円滑な移行・腫瘍医自身のストレスおよび燃え尽きの減少などと関連しているという調査がある。

こうした例から、医療者のコミュニケーション能力は医師（医療者）患者関係に対する影響が大きいことが考えられる。

他職種協同のチーム医療におけるコミュニケーション

医師だけでなく看護師や薬剤師の関わりによって、服薬遵守など前向きな治療行動につながり血圧や血糖値などの治療アウトカムが改善すると知られている。

更には多職種による円滑なチーム医療の実践により患者満足度が上がり、治療アウトカムも改善し、チーム医療の成否を握る鍵となる要素の一つにコミュニケーションが挙げられている。こうした多職種の医療従事者と患者との関係もまた、医療アウトカムに影響を及ぼし得るといふ報告もある。

我が国でも医師だけでなく、薬剤師、看護師、心理士等多職種の医療従事者が連携して患者の治療を目指す「チーム医療」の実践が目指されている。医療従事者にとって、「自分の考えを相手に確実に理解してもらうための伝達・表現能力、また相手の立場に立っても

のを考える能力」とされる共感力は重要である。

薬剤師に求められるコミュニケーション能力

近年になって薬剤師の業務において、調剤以外の役割が注目され始めている。薬剤指導や他職種と協働したチーム医療の実践、臨床アウトカムの向上や健康推進など、薬剤師の職業実践の様々な過程でコミュニケーション能力は患者満足度や信頼の獲得に大きな影響を与えることが考えられる。実際に、日本では厚生労働省の主導により「対物業務から対人業務へ」という目標が示され、薬剤師に求められる役割が変化しつつある。例えば、病院薬剤師が緩和医療チームの必須構成要員となったことや、患者への薬剤指導を含む一部の病棟業務に対して診療報酬が認められたことなど、対他職種・对患者といった対人業務の要請・期待が強まっている。

こうした動きに沿って、我が国でも薬剤師の養成にあたって高度な専門性と十分な教育を担保するため、教育期間が6年間に延長されるなどの対応がなされている。

チーム医療の成立や服薬指導などの実務に当たってコミュニケーション能力が必須と予想される。このため、本研究では薬剤師及び薬学部学生を対象とした。

コミュニケーション能力に関わる個人的特性

精神医学領域において社会適応上問題となることがある個人の偏りのある発達特性として、知的能力・基本的学習能力（書字・読字・算数）の他に、自閉様特性（コミュニケーション能力・社会性・想像性）や ADHD 様特性（不注意・衝動性）等がある。

医療者自身のこうした特性に始まり技術・経験、精神状態、基本的発達特性といったものが、共感性に代表されるコミュニケーション能力や医療職の燃え尽き・共感性疲労を含む医療者患者関係と関連した臨床アウトカムにどれ程影響を与えているか、また介入による医療者患者関係の向上の可能性については不明な点が多い。

また、これらの個人的特性は従来、変化に乏しいと考えられているため、個人特性による負の影響の可能性が排除できない場合に備え、可塑性に富んだ教育介入が可能な概念についても特定する必要がある。例えば、情動知能という概念は、自分の情動を知り衝動の自制ができる能力、他者に共感を覚える能力、

集団の中で調和を保ち協力しあえる対人関係能力などから成り、教育や経験を通して改善・習得可能であり、心身の健康や環境への適応につながるとされており、介入可能な要素として挙げられる。

上記の通り、様々な臨床アウトカムに直結し、医療者側のコミュニケーション能力を始めとした共感能力の背景にある個人的特質を発達特性の観点から検討し、特に病院薬剤師に注目し、更にはその介入可能性まで視野を広げることが目的とした研究を行う。

2. 目的

病院薬剤師・薬学部学生の対人コミュニケーション能力と発達・心理特性について、個人の心理的特性が共感的態度や職業的燃え尽き・共感性疲労に影響するか否かを検討し、その上で情動知能がその関係を媒介するか否かを検討する。

B. 研究方法

【研究デザイン】横断研究

【対象の選択基準】

適格条件

- (1) 岡山県病院薬剤師協会に所属する対人実務を行う薬剤師（解析1・解析2・解析3）、または研究実施時に6年制薬学部に在籍する5～6年生
- (2) インフォームドコンセントが得られている者

【評価項目】

独立変数

自閉様特性：The Autism-Spectrum Quotient (AQ) … (50項目) (解析1・解析2・解析3)

自閉様特性の高さを5領域（社会性・コミュニケーション・想像力・注意の切り替え・細部への注意）から評価する。

従属変数

医療職の共感性：The Jefferson Scale of Physician Empathy (JSPE) … (20項目)

全般健康度：General Health Questionnaire

(GHQ) … (12項目)

一般的な精神健康度について評価する。閾値（4点）以上は、何らかの精神疾患の可能性が示唆される。

統制変数

情動知能：EQS（エクス EQ（情動知能）スケール）… (65項目)

情動知能の高さについて評価する。

社会・人口統計学的項目

年齢、性別等

【調査方法】

1. 本研究実施時に岡山大学薬学部薬学科を含め、本研究参加に同意した大学薬学部等組織に所属する薬学部学生、及び岡山大学病院を含め、病院・会社に属する薬剤師であって本研究について書面で説明し、同意が得られた者を対象とする。
2. 同意を得られた者に対し、上記評価項目から構成されるアンケート冊子を配布し、順次回答を得る。
3. 回答終了後、直接または郵送にて冊子を回収し、欠損値の有無を確認する。欠損値がある場合のみ、個人情報参照して本人と連絡を取り、回答を確認する。
4. 得られた結果に対し、統計学的解析を行う。

【解析方法】

AQを独立変数、JSPEを従属変数、ECS・社会的背景・人口統計学的項目を統制変数とし、AQとJSPEとの関係にEQSが媒介するか否かについて、媒介分析（Mediation Analysis）による解析を行う。

C. 研究結果

完全な回答が得られた373人の薬剤師と341人の薬学部学生から得られた回答に対し、Mediation model（媒介モデル）により、AQとJSPEの関連、AQとGHQの関連はEQSによって媒介されるという仮説を検証した。AQとJSPEの関連において、間接的関連を示す係数 $a1*b1=-0.2512$ （薬剤師）、 $a2*b2=-0.2791$ （学生）であり、共に有意（ $p<0.05$ ）であった。また、AQとGHQの関連において、間接的関連を示す係数 $A1*B1=0.0767$ （薬剤師）、 $A2*B2=0.0807$ （学生）であり、共に有意

($p < 0.05$)であった。

D. 考察

様々な構成要素を含む自閉様特性であるが、この中でもコミュニケーション・共感との関連が大きいと考えられる要素があり、過去の研究で示したように、薬剤師における自閉用特性と共感的態度は負の関連、自閉様特性と職業的な燃え尽き・共感性疲労との関係は正の関連となっていると考えられる。

こうした個人特性が及ぼす影響に対し、新たな介入法を開発する際には特に自閉またはADHDといった特性を持った対象への介入を考慮する必要がある。更に、今回の結果で示されたように、情動知能はこれらの悪影響を緩和し得る。今後、対人業務を行う病院薬剤師を対象とした特定の介入を用いることにより、一連の研究で示された個人特性の及ぼす影響を緩和する手法・介入について検証が必要と考えられる。

制約・研究限界

自記式尺度に対する回答結果のみをまとめており、行動観察等の客観的評価との間に乖離が生じている可能性がある。妥当性が検証された評価尺度を用いているが、調査参加時の気分や環境、個人的事情によって回答が左右される可能性がある。プライバシーの観点から、個人的背景は聴取していないため、心理的苦痛や共感性疲労をもたらす原因が職場によるもののみとは限らない。横断調査のため、各変数間の因果関係は不明である。返信率が50%弱であり、選択バイアスの可能性がある。一地域の薬剤師協会からの結果であり、一般化可能性に限界がある。

E. 結論

個人のコミュニケーション特性と関連のある自閉様特性は誰もが部分的に持っているものであるが、この特性の強弱は対人業務を行う病院薬剤師の共感的態度を始め、燃え尽き・共感性疲労に対して負の影響を及ぼす。個人の特性であり、変化させることが難しいと考えられる自閉様特性に対し、具体的な介入法について検討が必要となる。副次解析から、情動知能という概念はこれらの悪影響を緩和する可能性が示唆されており、今後の研究が必要となる。また、今回の研究では具体

的な調査対象として病院薬剤師を選び、上記を明らかとしたが、この知見は広く対人業務に携わる他の医療従事者にも適応可能と考えられる。

F. 健康危険情報

特記すべきことなし。

G. 研究発表

論文発表

1. Higuchi Y, Inagaki M et al: Emotional Intelligence Mediates the Relationships Between Autistic-like Traits, Empathic Behavior, and Psychological Distress in Pharmacists and Pharmacy Students. American Journal of Pharmaceutical Education. In press

学会発表

なし。

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得
なし。
2. 実用新案登録
なし。
3. その他
なし。